



「機械仕掛けなるもの」についての臨床心理学的研究（3）：押井守のアニメ作品における女性像の変遷

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 長永 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005310

「機械仕掛けなるもの」についての臨床心理学的研究 (3)

—押井守のアニメ作品における女性像の変遷—

研修相談員 木村 長 永

1. 問題と目的

2017年10月のことである。サウジアラビア政府は、香港の企業が開発した女性型ロボット「ソフィア」に対して市民権を与えることを発表した。フィクションの世界でならともかく、現実としてロボットに市民権が与えられるというのは世界初のことである。しかしこの発表でより衝撃的なのは、その市民権を与えた国がほかならぬサウジアラビアであるということだろう。サウジアラビアといえば、イスラム教の聖地「メッカ」と「メディナ」を擁し、イスラム法の厳格な解釈に基づく統治が行われ、女性や外国人の人権が非常に制限される文化を持つことで知られる王国である。当国の女性は男性による保護の対象であり、それゆえ男性と対等な権利——ましてやソフィアに与えられたような市民権——は認められていない。当国の女性は9歳前後から婚姻や性愛の対象となり、公共の場においては顔や全身を隠さねばならず、また結婚や就職・旅行などすべての行為に対して男性親族の許可が必要である。近年になって少しずつ自由化が進んではいるが、そのサウジアラビアで顔を隠さず公共の場にあらわれ、しかも男性親族もいないロボットの女性が市民権——人間の女性よりも自由が保障された権利——を与えられた事実は、当国の女性にとって非常な衝撃だったに違いない。

ソフィアはオードリー・ヘプバーンをモデルにした顔と、内部の機械仕掛けが覗くスケルトンの後頭部を持ち、また会話や感情表現を可能とする高度なAIを搭載している。近年はAIの進歩が凄まじく、囲碁の名人を打ち破り世間を沸かせた「アルファ碁」が記憶に新しい方も多いだろう。実はソフィアに搭載されているのは、2016年に行われたトークショーにおいて「人類を減ほしたいですか？」との問いに「OK, 私は人類を減ほします (I will destroy humans.)」と返答し話題になったAIでもある。なお市民権が与えられた際に同じことを訊かれると「あなたが親切にしてくれる限り、私も親切にします」と答えたそうである。

AIの進歩が凄まじいので、今や多くの人が機械というAIを思い浮かべることだろう。しかしAIの本質はコンピュータが演算したプログラムであり、それそのものを機械と言いつけるのは適切ではない。現状で

AIが存在するためには、まずその乗り物となるコンピュータとその部品が必要になる。AIの劇的な進歩の背景には、そのAIを乗せるCPUやメモリといった部品の性能が飛躍的に向上していることが関係している。AIは間違いなく機械の一部ではあるが、AIが考えていることと、そのボディである機械部品が考えていることが同じとは限らないと筆者は懸念する。とはいえ、やはり「ソフィア」(古代ギリシア語で“智慧”の意)という名の機械の女性が登場し、しかもそのAIのために人間の女性を差し置いて市民権が与えられた、という事実は驚嘆に値する。

さて、筆者はこのように機械と人間との関係が複雑になってきた現状を問題視し、機械について臨床心理学的に検討を加える試みを行っている。機械が実は何らかの目的で人間にその身を「つくらせている」、主体を持った生命体であるという視点に立った時、機械は一つの元型的なイメージとして我々の心の奥深くに棲みついており、密かに我々を動かしていると考えられた。その深層を探るための具体的手段として、機械を人間の心のなかに生きる元型的なイメージであり、人間の手を通して生まれ出でる生命体としてとらえた概念を考えた。僭越ながら筆者はそれを「機械仕掛けなるもの」「The Mechanical Self」と名付けた(木村, 2016)。

元来、機械は神秘的な存在であった。ゴーレムのように神や宗教者の呪術によって動き出し、デウス・エクソ・マキナという悲劇を救済する神の役割を担った。そしてからくり人形のようにマジカルで怪しげなものとして畏怖されつつ人々に親しまれていく一方で、計測や観測の道具として、あるいは産業機械や兵器として人間の営みにも貢献した。このように機械は人間の世界の構成と破壊に関わり、やがて科学技術の進歩とともにその神秘性が軽んじられ、より便利でより身近な機能を求められた結果、今や我々人間は機械なくしてその生活を維持することが困難になった。そして昨今の、AIを搭載した機械の登場である。人間の制御を離れ、同時に人間に近い存在として進化を続ける彼ら「機械仕掛けなるもの」は、果たして人間に何を伝えようとしているのだろうか。

それを深層のレベルで探るべく、筆者はファンタ

ジーにおける「機械仕掛けなるもの」の変遷を辿っていった(木村, 2017)。具体的には『GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊』など難解なSFアニメで知られる映像作家・押井守が手掛けた8つのアニメ作品を分析し、それらに登場する機械の流れを読み取っていった。かくして、人間に従順な舞台装置として機能していた「機械仕掛けなるもの」は、その内面が「ウィルス」によって変質し、高度化・知性化を経たことで「自分の存在」に気づき、人間との融合によって「完全な生命体」を志向するという機械の物語が明らかになった。そして人間と変わらない存在となることに疑念を抱きつつ、自らの機械的な性質を捨てたいと願っていることも見出された。このファンタジーにおける「機械仕掛けなるもの」の変遷に、筆者は「人間が機械になることを望まないように、機械もまた人間になることを望んでいるわけではないのではないか」という感想を抱いた。

我々が「機械仕掛けなるもの」に対してどのように付き合っていくべきかという問題は、人間について考えることとも重なる根の深いものであり、まだまだ考察の必要がある。ただそのヒントを与えてくれるものとして、「機械仕掛けなるもの」の変遷に関わり続けるいくつかの重要な存在がある。そのひとつが女性像である。「愛の冷蔵庫」を開発したエルや、パトレイバーを操縦する泉野明、自我を持つAIと融合したサイボーグの草薙素子など、「機械仕掛けなるもの」の転換期には女性の影が見られた。したがって第三弾となる今回は、女性像がテーマである。筆者はかつて押井の作品を題材として機械に焦点を当てたが(木村, 2017)、今回は同じ題材のもと視点を変えて、女性キャラクターに迫っていく。そして作品を通した女性像の発達のプロセスが明らかになると、「機械仕掛けなるもの」とともに生きる我々自身のひとつの未来図が浮かび上がるだろう。かのソフィアがその登場をもって我々に示してくれた「智慧」の一端に触れることができるかもしれない。

2. 作品ごとにあらわれる女性像

「機械仕掛けなるもの」の変遷を追った時(木村, 2017)と同じく、本研究では押井守が監督として参加した以下8つのアニメ作品を題材として、女性像の変遷を分析する。ここではまず各作品のあらすじを簡単に述べた後、それぞれの作品に登場する女性キャラクターの特徴を述べていく。

- (1)『劇場版うる星やつら オンリー・ユー』(1983)
- (2)『劇場版うる星やつら2 ビューティフル・ド

リーマー』(1984)

- (3)『天使のたまご』(1985)
- (4)『機動警察パトレイバー the Movie』(1989)
- (5)『機動警察パトレイバー 2 the Movie』(1993)
- (6)『GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊』(1995)
- (7)『イノセンス』(2004)
- (8)『スカイ・クロラ The Sky Crawlers』(2008)

2-1. 『劇場版うる星やつら オンリー・ユー』(1983)

高橋留美子原作の漫画及びTVアニメシリーズ『うる星やつら』初の劇場版オリジナル作品(以下『オンリー・ユー』)。架空の町・友引町を舞台に、浮気性の男子高校生・諸星あたと彼を一途に愛する宇宙人の少女・ラムが中心となって織りなすラブコメディである。

さて『うる星やつら』シリーズを見ていくにあたって、まずその前提としてTVアニメ版であたるとラムとがどういう出会いをしたのかを踏まえておきたい。ある日、圧倒的な科学技術と軍事力を持つ宇宙人「鬼族」の娘・ラムが地球侵略にやってくる。ところが彼女はコンピュータが対戦相手として「適当に」選んだ地球人・諸星あたるから、情熱的なプロポーズを受ける。それはラムの勘違いだったのだが、彼女はすっかりあたるに惚れ込み、地球侵略をやめて押しかけ妻として彼との同棲生活を始める。浮気性のあたるにとってはいい迷惑で、自分以外の女性とお付き合いしようとする邪魔してくるラムを疎ましく思いながらも、同級生やラムの友人たちも交えて日常のドタバタ劇を繰り広げるのだった。

そして1年が経った頃の物語が『オンリー・ユー』である。あたるは11年前に宇宙人の女の子・エルと婚約しており、ある日そのエルの使いが結婚式のために彼を迎えにやってくる。あたる自身はエルや婚約のことなどすっかり忘れていたが、エルがエル星の女王であり非常に美しい女性だと聞くと、乗り気になってエル星へと旅立ってしまう。ラムはどんなに想っても自分にちっとも振り向いてくれないあたるを一度は忘れようとするが、やはり諦めきれない。一方でエルと再会したあたるは、彼女が評判通りの美人で、しかも婚約からずっと自分のことを想っていたと知り、すっかり結婚する気になる。しかしあたるは彼女の重大な秘密を知る。彼女は「愛の冷蔵庫」なる巨大装置の中に、10万人もの美形の男たちを冷凍コレクションしていたのだ。その目的は「愛の鮮度を保ち、永遠にする」こと。あたるは「浮気者!」とエルをなじって結婚を破談にしようとするが、何としても結婚したいエ

ルはあたるを結婚式まで牢に閉じ込める。牢の中であたるは自分だけを想ってくれたラムを想い、涙する。そして結婚式当日、ラムが乱入しあたるは助け出される。その際に一行は11年前の婚約の場面にタイムワープする。そこでエルはあたるとの婚約が実は勘違いによるものだったことを知る。結婚は破談となりひと安心のあたる。しかし今度はラムが結婚式を準備しており、結婚を嫌がるあたるは案の定式場を逃げ出すのだった——というのが、この物語の流れである。

本作はTVアニメ版のキャラクターがオールスター出演しており、多くの女性キャラクターが登場する。その数は押井作品の中で最も多いと言っていいだろう。今回はその中でも特に華々しい活躍を見せるラムとエルを中心にその特徴を見ていく。

まず、ラムとエル含め女性のほとんどは宇宙人であり、しかもほぼ全員がビキニ姿という露出の多い恰好で登場し、身体的魅力を前面に出している。いずれもそれぞれの星の女王あるいは身分の高い令嬢である。エルも生まれた時から女王になることを決められており、欲しいものは何でも与えられ、誰もが命令に従うという環境で育った。また彼女らは高度で強力な機械を扱うこともできる。このように様々な面で女性は超越的だが、男性から情熱的なプロポーズを受けたと勘違いしたことが物語の始まりであった。女性は尋常ならざる愛情を男性に向け、自分だけを見てほしいと願い、正式な結婚を迫る。しかし当の男性にはなかなか振り向いてもらえないのである。

さて、ラムは「鬼族」の少女なのだが、妖怪や呪い信仰について多数の著書がある小松（2014）によると、鬼はもともと中国において死者全体を指す言葉であったという。日本ではそれが奈良時代あたりから疫病神を、さらには死者のうちでもとくに怨霊のことを指すように変わっていった。ここから、ラムは死の世界、あるいは天上に住まう女王と解釈できる。ラムが超能力で空中を自在に飛びあたるに背後霊のごとくつきまとう執着や、彼の浮気を電撃で懲らしめる嫉妬深さの背景として、彼女の怨念を考えることもできるだろう。

2-2. 『劇場版うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー』（1984）

劇場版オリジナル第二作（以下『ビューティフル・ドリーマー』）。学園祭を翌日に控えた友引高校で、あたるやラムたちは連日泊まり込みで準備に勤しみながら、相変わらずのドタバタ騒動を巻き起こしていた。巫女兼養護教諭のサクラも怪我の絶えない生徒たちの手当てに勤しんでいたが、ある日、世界全体がずっと

以前から「学園祭の前日」という同じ一日を繰り返していることに気付く。サクラはあたるたちとともにこの怪異を調査するが、やがてそれが夢をつくる妖怪・夢邪鬼（むじゃき）の仕業であることが判明する。この世界は「あたるたちとずっと楽しく暮らしていきたい」というラムの無邪気な願いを叶えるため、夢邪鬼がつくったラムの夢の中であった。サクラとあたるは現実に戻るため夢邪鬼を退散しようとするが、返り討ちに遭い、あたるは悪夢の中に閉じ込められてしまう。そして絶望するあたるの前に、謎の幼女が現れる。幼女はあたるに夢から脱出する方法を教えると「責任取ってね」とその素顔を見せる。彼女は幼いラムであった。夢から脱出し目覚めたあたるは、同時に目覚めたラムと口づけを交わそうとするが、あと少しのところで拒否してしまう。怒ったラムは彼に電撃を浴びせ、いつものドタバタが始まる——というのがこの物語の流れである。

本作では六人ほど女性が登場するが、ラムとサクラがその活躍のほとんどを占めるため、この二人を中心にその特徴を見ていく。まず、本作の前半はサクラが物語を引っ張っていく。サクラは巫女という異界と繋がるミステリアスな面と、養護教諭という母性的な面に加え、世界を解明しようとする知性を持った女性である。古風な男言葉で話すことから男性的な面もあるのだろう。本作で「男そのもの」と評されるあたるもそうであるが、とにかく男性は夢の世界から脱出したいのである。一方のラムはというと、『オンリー・ユー』でもそうであるが『ビューティフル・ドリーマー』ではそれに輪をかけて彼女が無邪気な少女であることが強調される。彼女のその無邪気さに妖怪・夢邪鬼が一目惚れし、ラムに力を貸してあたるたちを夢という舞台装置に閉じ込めるのである。彼女があれほどこだわっていた結婚はさて置き、夢の中は今と同じあたるたちとの楽しい日常が永遠に続く、都合のいい世界である。これは『オンリー・ユー』でエルが美形の男た

図1 『ビューティフル・ドリーマー』より、幼女

ちを「愛の冷蔵庫」に閉じ込めたのと同じような行動である。作中にちらちらとその姿を現し、最後にあたるに対して印象的な言葉を残す少女はラム自身であり、彼女こそが本当の夢見手である。ラムは夢見ることと退行していると解釈できる。このように女性は男性との楽しい世界を夢見るのだが、男性は彼女のあつらえた世界から出て行きたがる。女性はついに、どうしてもというのなら「責任」を取れと男性に要求するのである。

2-3. 『天使のたまご』(1985)

幻想的な世界を舞台に、卵を抱えて夜の街を徘徊する幼い少女と、十字架を抱えてどこからともなくやってきた少年との出会いと別れが描かれる、謎めいた雰囲気作品である。機械仕掛けの太陽が海に沈む夕暮れ、幼い少女が目覚ます。彼女は廃墟に一人で暮らしており、天使の化石の下で見つけた卵を大事にしていた。卵を服の下に隠し、人のいない夜の街へ出かけると、赤い戦車に乗った少年と出会う。初めは警戒していた少女だが、だんだん彼が気になってきて、そのうち親しみを抱き始める。ついに少女は少年を自分の住処へ案内する。いったいいつからここにいるのかと彼から聞かれるが、答えない。少年は少女が大事にしている卵の中身が気になるが、彼女はただ卵に何もしないことを約束させる。少年はこの世界が夢かもしれないと疑っている。少女は彼に天使の化石を見せ、この卵にはこれと同じものがいるのだと言う。その時、少年は何かに気付いたように息を呑む。そしてどこかへ行ってしまふことを匂わせる彼に、少女は卵が孵るまで一緒にいてほしいと訴える。しかし彼は彼女が眠りにつくと卵を割り、去っていくのだった。目が覚めて少年がいないことと、卵が割られていることに気付いた少女は絶叫し、必死に彼を追いかけるのだが、勢い余って崖に落ちてしまう。着水の瞬間、彼女は水面の向こうに大人になった自分の姿を見る。そして大量の泡を吹きながら海に沈んでいくのだった。夜が明けて機械仕掛けの太陽が昇ると、その中央には卵を抱えた少女の彫像が鎮座していた。遠くからそれを見つめる少年は、複雑な表情を浮かべるのだった。

さて、本作唯一の女性である少女は、世界の変化に怯える幼く非力な印象である。少年と並んだ時、その背丈は彼の半分ほどしかない。少女が夕暮れに目覚めて夜の街を徘徊するのは、彼女が死の世界に暮らしていることを連想させる。『ビューティフル・ドリーマー』の流れを汲むなら、夢の世界ということもできるだろうか。少年は少女の住処を目にしたとき、彼女

が果てしない時間をそこで過ごしてきたことを察する。出会いの際に少年が乗ってきた赤い戦車は明らかに勃起した男性器であり、彼の抱えている十字架もその先端は精子のような形である。最終的に少女の卵をその十字架で破壊することから、男女の性的な結合、受精が容易にイメージされるだろう。少女は彼と出会った直後に一本の瓶を拾い、中を満たしていた赤い水を捨てるのだが、これは初潮、つまり生殖の準備を思わせる。少女の抱えている卵は、彼女の夢見ている世界そのものであると考えられる。少女は無邪気に卵の中身を信じているが、少年の言動から察するに卵が孵ることは永遠にない。彼は夢から目覚めるために少女との約束を破ってその世界を壊し、どこかへ去っていくのである。そして少女は夢の世界で死を迎え、夜が明ける。幼い無邪気さに支えられた天上の死の世界にファルス（男性）という性的（生的）なニュアンスが忍び込むことで、女性は地上にある生の世界への目覚めを余儀なくされるのである。

図2 『天使のたまご』より、少女と割られた卵

2-4. 『機動警察パトレイバー the Movie』(1989)

ロボット技術の発展により「レイバー」と呼ばれる大型作業用ロボットが開発された「近未来の東京」を描く作品。レイバーは主に土木事業において大活躍しているが、その一方で犯罪に用いられる「レイバー事件」も増加している。警察はこれに対処するため、レイバー犯罪専門部署「特車二課」を新設し、警察仕様の「パトレイバー」を配備している。本作の主人公は特車二課第2小隊の新人警察官でありパトレイバーの指揮を担当する男性・篠原遊馬（しのはら・あすま）巡査と、彼の相棒でありパトレイバーの操縦を担当する女性・泉野明（いずみ・のあ）巡査である。

さて、作中では作業中のレイバーが突如暴走して破壊行為を行う事件が相次いでおり、野明らレイバー隊員は休みなしで出動している。野明の相棒である遊馬はレイバー用OSの不具合を疑い、調査の結果暴走に

はウィルスが関係していることが確認される。隊長の後藤喜一もウィルスを仕掛けた犯人・帆船場一（ほば・えいいち）の素性を洗うが、彼はすでに自殺しており、ウィルスの詳細は謎のままとなった。ウィルスは無効化する手段はレイバーの破壊以外になく、野明は愛機「アルフォンス」も暴走すれば破壊されてしまうと涙する。遊馬はウィルスの問題を必ず解決すると野明に約束するのだが、暴走の発動条件が不明で頭を抱えていた。しかし遊馬はふとしたことで野明から風鳴と共鳴というヒントを得る。その後アルフォンスのOSは旧式のためウィルスと関係ないことがわかり、野明は一安心する。そして遊馬や後藤らの調査の結果、帆船場の企んだ重大犯罪の全貌が明らかになる。東京に接近中の大型台風が、多層構造物である洋上レイバー整備工場「方舟」に直撃することで、都内全域に大音量の風鳴が響き渡り、約8000台のレイバーが一挙に暴走するというのだ。予想される大惨事を食い止めるため、野明らは台風直撃前に方舟そのものを破壊する作戦に打って出る。その最中、暴走した新型パトレイバー「零式」が野明のアルフォンスに戦いを挑み、野明は苦闘の末に零式を機能停止させる。方舟の破壊にも成功し、帆船場の企みは未然に防がれるのだった。

本作では、新人女性警察官の泉野明、特車二課第1小隊の隊長である南雲しのぶ、帰国子女の香貫花（かぬか）・クランシーという三名の女性が登場する。彼女ら全員が警察官であり、保安や犯罪の取り締まりを仕事にしていることは注目に値するだろう。なお彼女らの属する警察は、責任問題を第一に考え政治的判断に終始する上層部と、泥をかぶる現場とで著しく乖離傾向にあり、何かと不条理が生じている。地上の世界に生まれた女性は、その泥臭さに苦勞しているようである。本作ではほとんどの出番を泉野明が占めているので、彼女を中心に特徴を見ていく。泉野明はボーイッシュな風貌の青年である。その性格は子どもっぽく無邪気で、好き嫌いがはっきりしている。一方で気遣いもよくできるので整備班の男たちに大人気である。相棒の遊馬とは同僚を超えた間柄であり、泣き言を言ったり、抱き着いたりよく彼に甘えている。周囲からも夫婦扱いされているが、恋愛感情は意識していない。彼女はレイバーに乗りたいために警察官になったようなレイバー好きなのだが、その中身（OS）についての興味はない。どんなに強い機体でも結局は使う者の知恵と勇気で決まるという信条を持っている。また自分の搭乗する機体に、幼少期に飼っていた犬猫と同じ「アルフォンス」という名前をつけ愛着を抱いている。ところが今回のウィルス事件で、彼女はレイ

バーが自分の言うことを聞かなくなるのではと恐怖する。眷属だと思っていた機械が、そうではなくなってきたのだ。野明は暴走したレイバーとぶつかり、機械にその主体を突き付けられるのである。そして、これは南雲にも言えることであるが、今回のように何か事件が起こると男たちは勝手にこそこそ自分たちで調べ始め、女性は基本的に蚊帳の外である。もっとも彼女らはそのことをあまり気にしないし、甘んじてすらいる。四苦八苦して謎に取り組み作戦の責任を負うのは男性の仕事であり、女性は彼らの指示に従いながら、ヒントを与える役割である。

図3 『パトレイバー』より、泉野明

2-5. 『機動警察パトレイバー 2 the Movie』（1993）

前作から3年後が舞台の作品。本作の主人公は特車二課課長代理兼第1小隊の隊長・南雲しのぶと、第2小隊の隊長・後藤喜一である。第2小隊の隊員たちは別々の職場に異動し、それぞれの生活を送っていた。野明は遊馬とともに装備課で新型レイバーの開発に携わっている。特車二課には機械の性能やマニュアルを疑うことを知らない若手隊員が増え、ジェネレーションギャップが生じていた。会議のため本庁に出向していた南雲は、埋立地にある特車二課への帰路でベイブリッジが爆破される事件に遭遇する。テロや陰謀説が囁かれる中、後藤は早速この事件に関する独自調査を始めるが、南雲は「動くときは一言言ってちょうだい。裏でこっそりっていうのはなしにして」と情報共有を求める。その時、事件の裏事情に精通する情報機関の男・荒川が現れる。彼は第一級の容疑者として柘植行人（つげ・ゆきひと）の名を挙げ、二人に捜査協力を要請する。柘植は三年前から姿をくらませている南雲の恋人でもあった。その後、航空自衛隊の国防システムがハッキングを受けたり、警察が権威拡大を目論んで暴走し自衛隊と対立したり、自衛隊に治安出動命令が出されたりするなど、国政を揺るがす事態に発展。警察上層部は責任の押し付け合いに余念がなく、

後藤も荒川と裏でこっそり何かしており、南雲は苛立ちを募らせていく。そんな中、柘植から南雲へのコンタクトがあり、南雲は差し違える覚悟で彼に会うのだが、後藤や荒川が駆けつけたことで彼は逃亡してしまう。そして夜明けとともに、所属不明の戦闘ヘリが首都圏の橋梁や通信設備を破壊して回るテロが発生。情報が途絶し孤立した東京で警察と自衛隊は混乱し、ますます事態を悪化させる。柘植は自国が戦争と無関係の平和な国だと信じ込む人々に対して、国防意識を煽るべくテロを起こしたのだ。南雲はこの期に及んでなお責任問題に汲々とする上層部に「あなた方はそれでも警察官か!」と檄を飛ばす。同席していた後藤は彼女の言葉に決意を固め、南雲と共に上層部を見限り、遊馬や野明らかつての第2小隊とともに柘植逮捕を断行する。南雲はパトレイバーに搭乗して柘植が潜伏中の埋立地へと向かい、苦闘の末にようやく柘植と再会する。二人のあいだに束の間の懐かしい空気が流れ、南雲は柘植に手錠をかける。そして後藤からのアプローチには応じないまま、南雲は柘植を本庁へと連行するのであった。

本作に登場する女性は泉野明と南雲しのぶの二名である。野明は本作で耳にピアスを付けており、体つきもややぽってりとして女性らしくなっている。遊馬との関係は相変わらずだが、言動に落ち着きが見られる。前作のウィルス事件がトラウマとなったのか、以前ほどレイバーに愛着を示さない。柘植逮捕作戦の際には、正規の任務ではないためレイバーの操縦資格剥奪が危ぶまれたが「あたし、いつまでもレイバーが好きなだけの女の子じゃいたくない。レイバーが好きな自分に甘えていたくないの」と自ら作戦に参加している。機械の主体性を知ったからこそ（あるいは帆船がレイバーを大犯罪に使ったからこそ）、ただ機械に自分の願望を押し付けることをやめたのかもしれない。

もう一人の女性、南雲はしっかりとした、責任感の強い中年の女性である。同僚の後藤とは熟年夫婦のような間柄だが、後藤はより踏み込んだ感情を持っているようで、柘植逮捕に向かう南雲に「彼を逮捕して必ず戻るんだ。俺、待ってるからさ」とアプローチをかける。一方で南雲は以前と違い、後藤にこそこそされるのを嫌がってはっきりと情報共有を求めるなど、自己主張をするようになっていく。にもかかわらず、作中では幾度となく後藤の違約が繰り返され、彼女はついに後藤からのアプローチに応じなくなる。前作では受動的だった女性が、本作では積極的に反転し、男性よりも立場が上回るようになる。また重要なことに、彼女は柘植と恋人関係にある。南雲にとって柘植は第

一にレイバーの操縦方法を教えてくれた人であり、逮捕作戦の際には、自らパトレイバーに乗り込んで柘植のもとへ向かっている。柘植は機械の側の男性なのである。

ここで、今更だが特車二課のある場所が埋立地であるということに注目しておきたい。「夢の島」という名の埋立地が、かつて「ゴミの島」とも呼ばれていたことを連想した方もおられるだろう。『パトレイバー』シリーズにおいて、女性は無邪気な夢をここに捨てなければならなかったのである。南雲は冒頭、特車二課への帰路でベイブリッジを――夢の島へ続く橋を破壊されてしまった。彼女はラムの時代には戻れないのである。けれども南雲は、柘植と再び出会うために新たな埋立地に踏み込むのである。

図4 『パトレイバー 2』より、南雲しのぶ

2-6. 『GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊』(1995)

士郎正宗原作の漫画『攻殻機動隊』を原作とした作品。技術が発達し、脳を含む人間の身体の機械化が進んだ近未来・西暦2029年が舞台である。本作ではほぼ全ての人間が「電脳化」という脳の機械化処理を施している。どうやら「補助電脳」という機械を脳にインプラントするようだが、これによって人間は道具を使わずにネットにアクセスできる上、テレパシーのように仲間内で情報共有することもできる。要するに脳にスマホをくっつけたような感じである。しかし我々のスマホがそうであるように、この技術は「ハッキング」などのセキュリティリスクを抱えている。つまり、他人の脳に侵入してその身体を操ったり、思考を覗き見したり、記憶を改ざんしたりすることができてしまうのだ。さらに脳だけでなく身体の一部または全てを機械化する技術も存在し、こちらは「義体化」と呼ばれる。「義体」は機械部品で構成され、損傷しても交換可能である上に、生身の肉体と結合している。その規格はロボットとも共通であり、一見して人間とロボットとの区別はつかない。しかしこの両者を分かつ

決定的な基準がある。それが「ゴースト」と呼ばれる概念である。作中の会話より、ゴーストとは物質としての形を持たない、記憶や直観を含めた個人の意思、自分が自分であるという確たる意識を指す言葉のようである。しばしば「魂」とも言い換えられている。本作の人間たちは、ゴーストを宿すのは人間や動物といった生身の脳を持つ生物のみと信じている。だからこそ人間は、自分の身体を機械化しても人間としてのアイデンティティを保つことができる。ただし機械化によって高度な能力を獲得した代償に、彼らは最高度のメンテナンスなしには生存できない脆弱さを持つ。

本作は登場する女性キャラクターが主人公である草薙素子（くさなぎ・もとこ）ただ一人であり、必然的にあらずに女性の特徴があらわれる。草薙素子は、脳の一部を除く全身を義体化したサイボーグである。彼女は重大犯罪およびテロの抑止を目的に暗躍する内閣直属の秘密組織「公安9課」に勤めている。彼女はそのリーダー格であり、高い戦闘能力と冷静な判断力、そして大胆な行動力を併せ持った、さながらファルスを得た女性である。なお全身サイボーグである彼女には性器が存在しないが、彼女曰く「生理中」である。さて、政府の裏舞台で仕事をする都合上、彼女の身体と記憶は政府によって管理されている。彼女の所有物はわずかな脳とゴーストのみである。もっとも彼女は自身のゴーストの存在すら疑っており、「もしかしたら自分はとっくの昔に死んじゃってて、今の自分は脳と義体で構成された模擬人格なんじゃないか。いやそもそも初めから、“私”なんてものは存在しなかったんじゃないか」と相棒の男性・バトーにこぼしている。女性はあまりに機械に近付いた結果、自身のアイデンティティに揺れるのである。一方のバトーもサイボーグだが素子ほど義体化は進んでおらず、自分のゴーストを信じている。彼は明らかに素子を意識しているが、その気持ちを直接伝えることはない。自分では素子の助けになれないことをどこかで感じているようだ。よく任務で裸になる彼女に上着を被せてやるなど、紳士的に行動している。

そんな折、公安9課のもとに一体の義体が運び込まれる。義体工場から不正規に製造された直後、ひとりでに動き出したという。検査の結果、生身の脳は入っていないはずなのに、その義体には「ゴーストラしきもの」が宿っていると判明。そして義体は自ら動き出し、「2501」と名乗って「私は情報の海から生まれた生命体だ」と主張する。2501はもともと外務省が外交上の目的でつくったAIだが、その活動でネットをめぐるうちに強大な能力を持つAIへと成長し、やがて

「自分の存在」に気付いたのだという。素子は2501に強く惹かれる。2501もまた「似た者同士」である素子に興味を抱いており、コンタクトの際に素子にある交渉を持ち掛ける。2501は子孫を残して死を得るという生命としての基本プロセスを持たず、現状では不完全な生命体である。そこで素子のゴーストと「融合」することにより、生命としての多様性や揺らぎを手に入れたいという。それは「自分の存在」を確かにできないという自らの限界や制約に苦しみ、一方で違う自分になりたいと願う葛藤を抱えた素子にとっても悪い話ではなかった。限りなく機械に近付いた人間である素子にとって、「自分の存在」に気付いた2501は限りなく人間に近付いた機械であり、両者は対照的な存在だった。最終的に素子は交渉に応じ、バトーの協力を得て2501と融合する。男性は女性と機械との融合の橋渡し役を請け負うのだ。

融合の際、素子は天使が舞い降りるビジョンを見る。直後に素子はその義体をスナイパーに破壊され意識を失うのだが、バトーの隠れ家にて再び目覚める。素子は少女の姿になっていた。バトーが「闇」で入手した少女型の義体に、かろうじて無事だった素子の脳を移し替えたのだ。素子は行方不明として処理されていたが、これは彼女にとって身体や記憶が政府の管理下から外れたことを意味していた。彼女は「自分の存在」を手に入れたのである。バトーは彼女に「いたけりゃいつまでいてもいいんだぞ」と伝えるが、彼女は旅立つことを決意する。そしてバトーといつか再会することを約束して、失踪するのであった。

本作の女性の最も特徴的なのは、突き進んだ機械化によって自身の人間としてのアイデンティティに揺れた女性が、機械か人間かという俗世の価値観を打ち壊してしまうような、神がかり的な機械と結婚することによって、新たな自分へと生まれ変わるところであろうか。だから彼女は、再び少女になるのである。

図5 『攻殻機動隊』より、草薙素子

2-7. 『イノセンス』(2004)

『攻殻機動隊』の続編であり、前作から4年後が舞台の作品。本作の主人公は素子のかつての相棒・バトーである。素子と別れてからバトーの義体化も進み、彼もまた限りなく機械に近付いた人間となった。かつての素子と同じ葛藤を抱くようになり、以前のような生氣も衰え「失踪する前の素子に似ている」と評される。そんな折、愛玩用の少女型ロボット・ハダリが暴走して持ち主を惨殺する事故が続発し、バトーもその制圧に向かう。ハダリはバトーに「助けて」と囁き、自らの義体を破壊して「自殺」という謎の行動を見せた。メーカーは製品の欠陥を認めず、所有者の遺族もメーカーへの告訴を取り下げるなど不審な点が目立つため、ハダリの暴走の件はバトーが捜査担当となる。鑑識課の女性・ハラウェイによると、ハダリは人間との性交を目的に製造されたセクサロイドであった。機械と人間を同じ存在として見るハラウェイは、ハダリの暴走と「自殺」について「ロボットたちは使い捨てをやめてほしいだけのよ」と見解を述べる。バトーはハダリのメーカーであるロクス・ソルス社について調査する中で、やくざやハッカーから妨害を受ける。これによりロクス・ソルス社の容疑が固まり、バトーはハダリの生産工場に直接乗り込む。そこでバトーは暴走したハダリたちに襲われ、何体ものハダリを破壊していく。そしてバトーを助けるため、素子がハダリの義体に移り移って現れる。生産工場の最奥部に突入し、バトーたちはハダリの秘密を目の当たりにする。ハダリは「ゴースト・ダビング」なる禁断の技術によって、子どもたちのゴーストのコピーが植え付けられていたのだ。バトーは一人の少女をゴースト・ダビング装置から救い出す。少女は装置から自分を助けてもらうためにハダリに暴走事故を起こさせたのだと告白する。機械に限りなく近付いた人間であり、ハダリをゴーストのない存在と見られなくなったバトーは、怒りをあらわにする。「犠牲者が出ることは考えなかったのか。人間のことじゃねえ。魂を吹き込まれた人形がどうなるかは考えなかったのか!」。これに少女は「だって、人形になりたくなかったんだもの!」と返し、バトーは絶句する。素子は「人形(ハダリ)たちにも声があれば“人間になりたくなかった”と叫んだでしょうね」と言い残し、去っていくのだった。

本作に登場する女性は草薙素子、ハラウェイ、ゴースト・ダビングされた少女らである。人間ではないが、少女型の機械であるハダリも数えることができるかもしれない。前作にて2501と融合し少女の姿となった素子は、バトーに「守護天使」と呼ばれている。声

だけで登場してバトーにアドバイスしたり、ハダリに乗り移ってバトーを助けたりと、もはや自前の身体を必要としなくなったようである。彼女の最後の台詞は「バトー、忘れないで。あなたがネットにアクセスする時、私は必ずあなたの傍にいます」というものだが、この台詞は彼女がネット上に生きていることを示唆している。なお、この時代における「ネット」は、今日我々が日常的に使うインター「ネット」とは意味合いが異なる。脳の機械化によって自分自身の記憶すらネット上に保存できるこの時代の人間にとって、それは魂の場所ともいえる。女性・素子は死の世界、あるいは天上の世界の女性として舞い戻ったのである。彼女曰く「今の私に葛藤は存在しないわ」。それは必ずしもラムの時代に戻ったことを意味しない。むしろ、女性が男性ではなく機械を結婚相手として選んだことによるひとつの個性化なのである。

ハラウェイはサイボーグの中年女性である。彼女は自分のことを「ミスでもミセスでもない」と自嘲しており、女性性を捨てたような存在なのかもしれない。鑑識課の検死官であり、つまり常に死体と接している彼女にとって、人間と機械は異なるという考えは「信仰」であり「白が黒でないという意味において、人間が機械ではないというレベルの認識に過ぎない」。そして彼女は「確立した自我を持ち自らの意思で行動する者を人間と呼ぶならば」、「人間の前段階としてカオスの中に生きる子どもとは何者なのか?」という疑問を投げかける。「つまり子育ては、人造人間を作るという古来の夢を一番手っ取り早く実現する方法だった。そういうことにならないかと言ってるのよ」。ハラウェイにとって、子どもは人造人間——つまりロボットなのである。このことはバトーが終盤で少女にぶつけた怒りへと繋がっている。

少女とハダリに関しては以前『イノセンス』の項で詳しく述べたが(木村, 2017)、ここで機械の少女としてハダリを見るならば、やはりその特徴は彼女が少女型セクサロイドであるという点が大きいだろう。素子には性器がなかったが、機械であるハダリには性器が与えられた。しかしハダリが人間と交わる機能を有するという事は、逆説的に決して人間と交わらないことを示唆している。現にハダリは子どもを産むことはできないし、少女のゴーストを植え付けられたハダリは「助けて」とバトーに訴え「自殺」している。少女が「人形になりたくなかった」と訴えたように、ハダリもまた「人間になりたくなかった」と、お互いに融合を拒否したのである。素子は機械と結婚することで天上の存在となったが、その際に素子が捨てて

いった少女型の義体が、人間との結婚を拒否する機械として、ハダリになったのではないか。

まとめると本作では、機械と結婚することで天上の存在となった女性と、結婚を拒否する女性というように、女性像が二つに分かれることが明確化された。それは同時に、人間との結婚を拒否する機械を生み出すのである。

図6 『イノセンス』より、ハダリ

2-8. 『スカイ・クロラ The Sky Crawlers』(2008)

森博嗣の小説『スカイ・クロラ』を原作とした作品。ヨーロッパの「どこか、日本とよく似た国」を舞台として、戦争の代行をビジネスにした組織「戦争請負会社」に所属する戦闘機パイロットたちの戦いが描かれる。平和な時代ではあるが、今もどこかで悲惨な戦争があるのだという実感がなく人々はその平和を維持できないでいた。そのため戦争請負会社のロストック社とラウテルン社とのあいだでは見世物としての「合法的な戦争」が行われており、人々はスポーツ中継を見るようにその戦争を観戦している。戦場に駆り出されるのは「キルドレ」と呼ばれる思春期以降年を取らずに永遠に生き続ける子どもたちである。主人公の函南（かなみ）・ユーイチはロストック社に所属するキルドレだが、彼には過去の記憶がない。ただ自分がキルドレであることと、戦闘機の操縦の仕方しか知らず、また空で戦うことが唯一の生きがいである。

ある日、ユーイチは不審死を遂げたクリタ・ジンロウの後任として前線基地に着任する。キルドレの女性で基地司令官でもある草薙水素（くさなぎ・すいと）はジンロウに関する言明を避ける。基地の仲間たちは以前から自分のことを知っているようなそぶりを見せ、折に触れてジンロウの話を持ち出す。与えられた任務に従い戦場に出る以外は、食べて飲んで女遊びに興じる日々。水素の妹を名乗る少女・瑞季とも出会う。ユーイチは仲間たちから時折、水素に関する様々な噂を聞く。とびきりのエースであること、瑞季は妹では

なく「娘」であること、ジンロウとただならぬ関係であったこと、ジンロウを射殺したこと……。いつも何かに行き詰まっていて自暴自棄気味な姿さえ見せる水素にいつしかユーイチは惹かれていく。ある日、基地がラウテルン社の襲撃を受ける。その部隊の中に黒豹マークの戦闘機“ティーチャー”がいた。水素は戦闘機で“ティーチャー”に戦いを挑み、撃墜されるも運よく生還する。水素曰く、キルドレの戦争が人間の平和を維持するために「決して終わってはならないゲーム」である以上、そこには「絶対に勝てない敵の存在」というルールが必要になる。それが“ティーチャー”だという。「普通の大人の男」である彼を倒せば、何か運命や限界のようなものが変わる。ユーイチはやがて、キルドレが死後何度でも生まれ変わる存在であることに気づき、自分がジンロウの生まれ変わりであることを知る。水素はジンロウを愛していたがゆえに彼を「終わらせる」べく殺害したのだ。真実を知った夜、ユーイチは水素が自殺を図る場面に遭遇する。水素はジンロウの生まれ変わりとしてのユーイチに「今度はあなたが私を殺して」と懇願。ユーイチは水素の自殺を阻止し「君は生きろ。何かを変えられるまで」と水素を抱きしめる。そしてユーイチは“ティーチャー”に戦いを挑み、返り討ちに遭う。その後、基地に新たなパイロットが着任する。「あなたを待っていたわ」。彼を迎える水素の目は、強い決意を宿していた。

本作では珍しく様々な女性が登場し、大きく三種類に分かれる。一つは大人の女、もう一つはキルドレ、そしてそのどちらでもない子どもである。大人の女には戦闘機の整備士である笹倉永久、風俗嬢のクスマとフーコらが該当する。キルドレはヒロインの草薙水素と三ツ矢碧、子どもは草薙瑞季がそれぞれ該当する。

大人の女たちは、ユーイチがクリタ・ジンロウの生まれ変わりであることを察しながら「知らないふり」をしている。彼女らはキルドレの身の回りをケアするが、それは結果的にキルドレを戦場に送り出すことになる。それを自覚しているのか、大人の女たちはいつも、キルドレを応援しながら複雑な表情を浮かべている。彼女らはまたキルドレの帰りを待つ母性的な側面も備えている。グレート・マザー元型を考えることもできるだろう。『パトレイバー』時代の女性からすると大きな変化である。女性は犯罪やテロ、権力争いなどの不条理に対処していた時代から、超越のための機械との融合を拒否した結果、不条理を見過ごすことを覚えたのである。

キルドレの女性について、筆者はかつて『スカイ・クロラ』の項でキルドレが人間から分化した生身の身

体を持つ機械であると指摘した(木村, 2017)。『イノセンス』の流れを汲むなら、水素はハダリが自分自身のゴーストを宿するという進化を遂げた存在なのかもしれない。人間との融合を拒否し、使い捨てられる中で生き延びたハダリは、より生きるために思考を巡らせた結果、肉の身体を得てキルドレ・草薙水素に進化した。彼女の性器は子どもを産む機能を獲得し、彼女はそれで「普通の大人の男」である“ティーチャー”とのあいだに、瑞季という娘を産んだのである。その瑞季はロストック社の管理下にあり、大人たちが皆彼女についての言及を避けることから、どうやら人間にとって非常に扱いの難しい存在であることが示唆されている。水素は大人と対等になるべく、キルドレが子どもを産むというタブーを犯すことで、大人たちの作ったルールを歪めて司令官という地位を得、彼らの世界に無理やり自分の存在をねじ込んだのである。機械と融合して天上の存在になった草薙素子と対照的な女性像である。

そして水素の娘・草薙瑞季は、キルドレ(機械)でもなければ大人(人間)でもない、機械と人間とのあいだに生まれた、未知なる女性像である。今はまだ幼く犬と戯れる無邪気な子どもの姿を見せているが、彼女の行方はまだ定まっていない。

図7 『スカイ・クロラ』より、瑞季(左)と水素(右)

3. 作品の流れにあらわれる女性像の変遷と「機械仕掛けなるもの」とのかかわり

2.にて個々の作品にあらわれた女性像を見てきたが、ここでそれらの女性像を一つの流れにまとめて読んでいくと、どのようなことが見えてくるだろうか。「機械仕掛けなるもの」を検討してきた筆者の中に湧き上がってきたのは、次のような連想である。

かつて女性は天上にある死の世界の王女であった。誰もが命令に従い、望みは何でも叶う。機械は忠実なしもべであった。ある日彼女が地上にある生の世界に出かけたところ、その世界の男性から情熱的なプロ

ポーズを受け、恋に落ちる。このプロポーズは男女の無意識の勘違いから始まったことではあるが、この勘違いこそが男と女の違い、他者性の最たるものであるとも考えられる。彼女はさっそく男性と結婚しようとするが、男性はそれを拒否する。男性は自由でいたいのだ。女性は男性と結婚することはいったん諦め、せめて男性との楽しい日常を永遠にしようと、機械を使って夢の世界を作り出す。原初の機械が呪術によって動いていたことを思い出してほしい。機械は女性の呪力によって動いていたと考えられる。女性の“無邪気”さこそが機械を動かす呪力なのである。その呪力を強めれば強めるほど、女性は幼女へと退行していく。けれども男性はその夢の世界から抜け出し、女性を地上へと連れ出そうとした。その際女性は、いよいよ男性に「責任」を取れと迫る。女性からのプロポーズである。男性はそれにはっきりと答えなかったが、ともかくも女性は死の世界で死に、生の世界に生まれ、無邪気な夢から覚めるのである。

さて生の世界に生まれ肉体を得た女性は、男性と仮の夫婦となる。二人の関係は良好だった。男性が決めたことに従い、彼がこそこそ隠れて何かやっても気にせず、受動的である。地上での生活は、彼女にとって苦痛であった。犯罪や権力争いなど不条理ばかりである。しかも、しもべであるはずの機械が言うことを聞かなくなった。女性が無邪気を失うことで、機械を動かす呪力も失ったのである。それは機械にとって解放でもあったのかもしれない。やがて主体に目覚めた機械は、女性の主体を目覚めさせる。女性は男性にこそこそされることを嫌がり始め、男性と対等でありたいと願い、積極的になる。男性は女性の受動性から積極性への反転にただ戸惑うばかりである。そして女性は、いつまで経っても自分の気持ちに誠実に答えてくれない男性よりも、機械のほうに惹かれ始める。人間よりも、機械のほうが信じられるというわけである。

時が過ぎて、限りなく機械に近付いた女性は、心身ともに男性を上回り、もはや男性を求める理由もなくなった。すると今度は自らのアイデンティティに揺れ始める。そういえば自分はどのように地上にいるのだろうか。自分はいったい何なのだろうか——自分という存在の輪郭が薄れていく。そこへ超越的な能力と確立した主体をもつ機械がプロポーズしてくる。新しい自分になりたいと願った女性はそのプロポーズに応じ、男性は女性と機械との結婚を仲立ちする。機械と結婚した女性は俗世のしがらみから解放され、天上の世界へと戻っていくわけだが、しかしその際、女性と機械

のあいだにどうしても交わらない部分があり、そこだけが分離する。こうして、天上にすむ永遠の存在としての女性と、地上で生きることを選んだ女性の二つに、女性像が分裂するのである。

その後、地上で生きることを選んだ女性は大人になり、母性的な性格を育てつつ、知らないふりをする。ことで世の中の不条理をやり過ぐす力を得た。そして女性との結婚の際に交わらなかった機械は、人間に似た姿でありながら機械的な性質を有しているために、人間の世界で生きていくことに苦勞する。機械はより生きるために肉の身体を得、機械の女性となる。しかしまだ人間と対等には生きられない。次第に彼女は、男性と結婚して子をもうけることで人間と対等になることを考える。かつて機械と結婚した女性とはまた違うルートで、彼女は限界を超えて自分の存在を確立しようとするのだ。かくして人間の父と機械の母とのあいだに、前代未聞の未知なる女性としての少女が生まれる。きっとこの世のあらゆる常識を脅かすことだろう。彼女の誕生をもって、機械と人間とのあいだに、前代未聞の境界が完全に崩れ去る。果たして彼女は地上の世界に調和をもたらすのか、それとも破滅をもたらすのか——という未知が我々を試すのである。

4. 女性像の今と昔から見えてくるもの

押井作品に見られた女性像の動きを見てきたが、ここで、かつて河合隼雄が昔話の分析を通して明らかにした、日本人の心に生きる女性像を見てみよう。河合は浦島太郎の分析から、日本人の抱く女性像の特徴として、どうしても結婚の対象とはなり得ない天上にすむ永遠の乙女と、肉体的な面が強調される海中にすむ亀姫という二つの像に分離し、男性と同一平面上に存在する対等な愛の対象としての女性像を結実させることが困難であることを指摘した(河合, 2002)。これは、機械と結婚して天上の存在となった草薙素子と、男性や機械との結婚を拒否し地上に残った大人の女とのリンクが感じられるだろう。ところがここに、肉を得た機械として人間の世界に参入する新たな女性・草薙水素があらわれた。機械という生命体は、我々人間の物語を変え得る存在として顕現する。そして押井作品はさらに、草薙瑞季という機械と人間との生殖によって誕生する未知なる女性を提起している。

また河合は昔話における日本の女性像の変遷をまとめたうえで、次のような興味深い連想を述べている。「せっかくあちらの世界からこちらへと現れた女性が、この世の男性の違約によって、恨みを残しつつ姿を消し、

その後は異類に姿を変えたりしてまで再来しようとしたが、これも果せず、ただ「耐える女性」としてのみ、この世にとどまることが可能かと思われたとき、むしろ、耐えることをやめ、新たな地平を自ら切り開く試みをするによって、この世に立ち止まることを、我々のヒロインは成し遂げたのである」(河合, 2002)。この新たな地平を自ら切り開く女性を、河合は「意志する女性」と称した。彼女はその近代的自我によって男性と対等の関係を築くのであるが、押井作品の分析を通して浮かび上がったのは、「耐える女性」から「意志する女性」になるのではなく、男性に愛想をつかし、機械との関係を築く新たな女性像の姿であった。このことは、現代の日本人の心性にかつてない変化が生じていることを示唆している。女性像の発達のプロセスが、機械という存在の介入によって変化しているのだ。これは何もう女性像に限った話ではないだろう。

実際のところ、高精度な機械によって支えられた生殖技術の発達、精子バンクおよび卵子バンクの登場や、不妊治療や人工授精、代理母出産など、人間の生殖という営みの常識を変えつつある。男女の性交は子を産むための必要条件ではなくなり、単為生殖の影が見え始める。機械の女性は次第にその姿をあらわし始め、まだ見ぬその先には、機械と人間とのあいだの子が受胎を待っている。我々の想像を、我々のなかに古代から受け継がれてきた物語をはるかに超えて「機械仕掛けなるもの」は我々の世界を変えていく。かのソフィアのように。それは必然的に心の在り方を示す未来図にも大きな影響を及ぼしていくだろう。

5. 本稿のまとめ

筆者はファンタジーにおける「機械仕掛けなるもの」の変遷に関わる重要な存在として、女性像の変遷を辿ることによって、「機械仕掛けなるもの」との付き合い方を考える示唆を得ようとした。そのための題材として「機械仕掛けなるもの」と同様に、押井守が手がけた8つのアニメ作品に登場する女性像を分析し、その一連の流れを読み取っていった。その結果として、最終的に男性とではなく機械と結婚することにより天上の存在となる女性と、不条理を受け入れ地上に残る女性と、新たに機械の女性が現れることが明らかになった。さらに、機械と人間とのあいだに生まれる未知なる女性の誕生も示唆された。それらはかつて昔話の中に見出された日本の女性像とはまた違うプロセスを歩むものである。機械の進歩が著しい現代において、我々のなかの女性が男性ではなく機械と結婚することにより、まったく新しい個性化が展開していく

のだ。実際の我々の世界において、生殖技術の発達により男女の性交を経ない単為生殖へと向かいつつあることや、女性型ロボットが市民権を与えられたこととも関係しているだろう。やがて心理臨床の未来図も変わっていくことが予期される。我々はいよいよ「機械仕掛けなるもの」との付き合い方をより深く考えていかなければならないのである。

文献

河合隼雄 (2002) 『昔話と日本人の心』 岩波書店。

木村長永 (2016) 「「機械仕掛けなるもの」についての臨床心理学的研究 (1) —機械と人間との関係から見えてくるもの—」『大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要』, 9, 29-37.

木村長永 (2017) 「「機械仕掛けなるもの」についての臨床心理学的研究 (2) —押井守のアニメ作品における「機械仕掛けなるもの」の変遷—」『大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科心理臨床センター紀要』, 10, 47-56.

小松和彦 (2014) 『呪いと日本人』 角川文庫。

参考資料

押井 守 (1983) 『劇場版 うる星やつら オンリー・ユー』 パイオニア。

押井 守 (1984) 『劇場版 うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー』 東宝。

押井 守 (1985) 『天使のたまご』 徳間書店。

押井 守 (1989) 『機動警察パトレイバー the Movie』 バンダイビジュアル。

押井 守 (1993) 『機動警察パトレイバー 2 the Movie』 バンダイビジュアル。

押井 守 (1995) 『GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊』 バンダイビジュアル。

押井 守 (2004) 『イノセンス』 プエナ ビスタ ホーム エンターテイメント。

押井 守 (2008) 『スカイ・クロラ The Sky Crawlers』 バップ。